

外国の文献から

『心情と知性の教育』

—日本の就学前と小学校教育に関する考察—

第五章 自律の原点

古賀 松香

日本の子どもたちは、大人の直接的な管理がなくても、授業の前にはいすに座って静かにしたり、クラス会議を運営したりといった活動を、自主的に行う。それは、何らかの褒美や罰があるからではない。寛大な家庭で育っている日本の子ど

もたちが、なぜこのような行いをするようになるのかということについて、幼稚園や小学一年生のクラスの自主運営の例をみながら、探っていくことにする。

帰りの会

帰りの会は生徒たちが運営するもので、生徒や教師がその日の活動を振り返る機会となっている。典型的なスタイルは以下のものである。

当番と呼ばれる二人の司会者が前に出て、クラスを静かにさせる。「目当ての反省」「気が付いたこと」「係からの連絡」「先生から一言」「さようなら」という項目にそって、会を進行していく。

例えば、その日の目当てを達成できたと思う人に拳手をさせるとか、「気が付いたこと」で拳手している人を指して報告させるといったことを、当番の子どもが行う。また、「係からの連絡」では、花係の生徒が教室に花をもって来てくれた人にお礼を言ったり、図書係の生徒が図書室の本を大切に扱うよう、クラス全体に注意したりする。教師は、「先生から一言」というところで、その

日気づいたことをコメントする。そして、当番がみんなを立たせ、「さようなら」を言うのである。

みんながリーダー——当番制

日本では、少数の子どもにリーダーになる特権が与えられるのではなく、生徒全員が順番にリーダーとなる。それが「当番」と呼ばれるシステムである。当番になったものは、教師と共にリーダーシップをとり、みんなに「くん」や「ちゃん」ではなく、「さん」づけで呼ばれる。

リーダーになることは一見立派そうだが、その仕事は決して簡単ではない。仕事の内容はクラスによって様々だが、必ずリーダーとしての明白な役割を担っている。例えば、幼稚園では、食事の前に静かになっているかどうか確かめて「いただきます」を言う、一年生では、授業の前にみんなを集め、静かにさせる、会を運営する、他の子の

態度を評価する、問題解決にクラスを導く、といった仕事である。

子どもたちは当番表をチェックしたり、次は誰の番かということに興奮して話したりするので、当番制に熱中していることがわかる。この当番制は、注意をひく、信頼される、他の子をリードすることへの子どもの自然な興味を利用しているようである。また、責任感という、喜びでもあり頭痛の種でもあるものを経験する機会にもなっているし、教師などの権威をもつ者に対する同情心をも育てているのではないかと思われる。

係活動

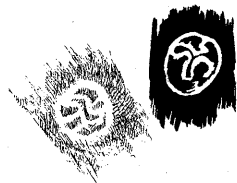
係は、クラスの生活をいかに高めていくかについでに、生徒たち自身の考えに基づいてつくられている。学校が始まる前や休み時間、給食時間、毎週あるクラスの会議の時間などに、自分たちで考え出した多くの活動を熱心に行う。壁新聞を書

いたり、家庭の物をリサイクルしたり、クラスメートを楽しませるために理科の実験をやってみせたりするのである。また、生徒はそういった係の活動を行

うだけでなく、反省の時間をもち、その時間に、みんなで助け合ったかなど、活動について反省する。当番制のように、係の仕事もクラスに貢献するための一般的な方法になっている。生徒たちはクラスメートのクラスへの貢献を振り返っているうちに、「よい生徒」や「いい人」のモデルをつくっているようである。

反省

一年生のたいいていのクラスで、生徒たちがその日の目当てを守れたかどうかや一日の自分の行動



について反省する時間がある。一人一人考える時間が与えられるという場合や、みんなで決めた目標を達成できたかどうか挙手する場合など、様々なやり方で反省を行う。

日本の子どもや親は、子どもへの教育達成の評価がアメリカ人より低い、皮肉なことに、実際は、日本の子どものほうが達成度は高い。また、

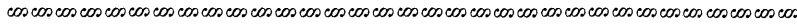
日本の子どもは、アメリカやヨーロッパの子どもよりも自分自身についての満足度が低いことも報告されている。このことは、子どもたちの「反省」という活動経験と結び付いているのではないかとと思われる。反省することで、子どもたちは自分の欠点に注意を向けてしまうのかもしれない。こういった自己批判的態度を寡黙さや劣等感と関連づけ、自己批判の適性レベルという興味深い問題提起をした日本の研究者もいる。

しかし一方で「反省」は、自分の行動について

考えたり、他の人の考えや感情をみる機会にもなっている。教師やクラスメートに支えられて、「反省」の時間は、信頼する友達との一日の活動を振り返る楽しいものであるようだ。今まだ私たちは「反省」についてあまり知らないが、日本の教育を理解するうえで重要な点であろう。

クラス会議

二人の当番が四十五分間、クラスの週の話し合いを運営する様子には驚かされる。当番はクラスの前に出て議事を進行していく。大まかに言うと、「今から話し合いを始めます」「今日はAとBを決めます」「初めにAについて話し合います」という具合に進行し、Aについての話し合いがまとまると「次にBについて意見を出し合います」と進める。Bについても話がまとまると、「何か他に決めることはありませんか」「これ



で話し合いは終わります」という流れで終わる。意見が分かれると挙手で決めたりし、そこで教師が口をはさむとか、仲裁するということはない。何か物事が決定するとそれを当番が確認し、黒板に書く。

自主運営

このように子どもたちはクラスの活動やルールを決めるところから関わっている。目先のことだけ考えれば、教師がクラスの活動やルールを一方的に決めたほうが効率的であろう。しかし、話し合いは生徒全員を巻き込むかたちになっており、子どもたち自身の問題を短絡的に教師が解決することは避けられている。

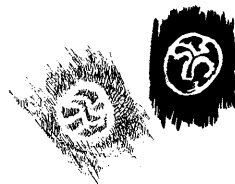
また、国の教育要領が社会的・道徳的発達を重視していることに支えられ、生徒が話し合いに参加し、思いや願いを分かち合い、ルールを守っているかどうかということを、教師は重要な教育

の達成尺度と見なし
ている。

教師の立場

日本の教師は権威的
にふるまわない。子ど
もたちの自主性に教師
の関心があるようだ。

いかにして、子どもたちに押し付けずに、ルールや係などのシステムを生み出すかという点で、多くの教師は苦勞している。例えば、ある幼稚園教諭は、子どもたちに新しい係を取り入れさせるために三か月間努力した話がある。それは、教諭が新しい係をつくろうと言うのではなく、子どもたちが、その必要性に気づくようにヒントを出し続けるという努力であった。そして、その教諭は「子どもは自らの活動を通して学ばなければならぬ。それは子どもたちのなかから生まれてくる



べきだ」と述べた。

また、日本の教師は、間違った行為に対して罰を与えたり、従いなさいと命令したりすることはせず、質問や説明、話し合いをすることが多い。

ある研究では、子どもは外的圧力や外的操作がないとき、つまり、自らのやる気にしたがっているときに、最もよくルールを内面化するということが示されている。それは、自らのやる気でルールを守っている自分をよい子としてとらえるからではないだろうか。別の研究では、監督されていると、人は、やらなくてはならないからやるという態度になり、やる気を減退させるとか、子どもが楽しんでる活動に対して褒美を与えると、その活動への興味が減退させるといふことが示されている。それはおそらく、外的な監督や褒美が、子どもの活動の楽しさから注意をそらしてしまうのだろう。つまり、子どもは監督や褒美のない外的

圧力のないところで、責任ある行動をするということになる。これは日本の実践と興味深い一致を示している。

さて、子どもたちは寛大な家庭から自制的な学校へいかに移行していくのかという、最初の問に戻ると、以上のことから、

- ・子どもたちもクラスのルール作りに関わる。
- ・すべての子どもがリーダーシップをとる機会をもつ。
- ・係などの活動を通して日々のクラスの生活に貢献する。
- ・自己反省し、自己評価する。

このようなことが子どもの自制的なふるまいに関わっていると思われる。

(お茶の水女子大学大学院)